

2024年6月23日（聖霊降臨後第5主日、特定7、B年）

牧師メッセージ

「いったい、この方はどなたなのだろう。」

（マルコによる福音書4：35-41）

司祭ヨセフ太田信三

船が荒波に飲み込まれそうになっているのに、イエスは眠ったままです。弟子たちの叫びに目を覚ましたイエスは、荒れ狂う波を静めました。これを目の当たりにした弟子たちは恐ろしくなり、「いったい、この方はどなたなのだろう。」と問います。荒波の恐ろしさもさることながら、目の前で人知を超えた出来事を起こした人間に対し、得体のしれない恐怖を抱くことは理解できます。ゾッとすると言いますか、畏怖と言うのでしょうか。奇跡物語はイエスという男が誰であるかを指し示す「しるし」です。水戸黄門の印籠を見て、人々が目の前のご老人が何者かを知るように、イエスの奇跡もそれを見た者に、イエスが何者であるかを知らせます。しかし印籠とは異なり、奇跡によって示されるものはすぐには理解できないものです。ですから、一体これは何だ？という疑問がまず起こります。しかしこの問から、イエスという男を知る旅が始まります。

というのは、今日の福音にはじまるマルコによる福音書の4章35節～8章26節までには、五千人の供食やイエスが海の上を歩く話しなどの奇跡物語が語られます。この一連の奇跡物語の締め括りである8章29節では、ペトロが「あなたはメシアです」という信仰告白をします。つまり、一連の奇跡物語によってペトロは、イエスがメシアであることを知り、信仰告白へと導かれるのです。奇跡はイエスが救い主であることを示す「しるし」だからです。今日の福音でそのしるしを目の当たりにした弟子たちは、「いったい、この方はどなたなのだろう」と問いました。この問いこそ、イエスが救い主であることを知ることになる、その出会いの旅の出発点だったのです。イエス様、あなたは一体何者なのですか、という問いこそが、イエスを真に知るための出発点なのです。

「私たちが溺れ死んでも、かまわないのですか」というセリフは、まさに苦しみにある中での祈りそのものだと感じます。荒れ狂う波に揺れる船は、教会にもたとえられます。わたしたちは、日々の中で、また教会においても、苦難の中で動揺し、葛藤します。何より、わたしたちはその苦難の中でイエスが「眠っている」ように感じられることがあります。しかし、そのような時に、今日の弟子たちの叫びを思い出したいと思います。「私たちが溺れ死んでも、かまわないのですか」というその叫びが、イエスの奇跡へとつながりました。どのような時であっても、イエスに叫ぶなら、道が開かれる。そしてそれを目の当たりにした時、わたしたちは「いったいあなたは何者なのか？」と問いかけることになるでしょう。その問いからはじまる旅の先に、イエスとの真の出会いが待っています。